

遠野市の在宅寝たきり老人訪問診療の実施 — 昭和 60 年代を振り返って —

吉田清子・細田重憲¹⁾・佐藤嘉夫²⁾・田中 尚・高田梨恵・三上邦彦・高橋 聡・岩淵由美

1. 研究の背景

遠野市は、国道 396 号線が走る釜石市と盛岡市を結ぶ中間に位置している。その発展は、1627 年、八戸南部氏が遠野に移り、城下町を築いたことに由来する。現在の遠野市ができたのは昭和 29 (1954) 年 12 月 1 日の昭和大合併によるものである。大型ショッピングセンターができたのは平成元年と、生活基盤の整備は遅れていた。¹⁾²⁾

山林と農業を主体としたこの地を奥田・井上(2013)は「内発的発展」の地としてあげる。地域住民が様々な取り組みを自律的に展開することにより、発展する地域³⁾と捉える視点である。

内発的発展を遂げる遠野市は、生活課題である医療拠点の不備をどのような手法を使い改善に結びつけたのかを明らかにするために、ここでは、その一部を公開する。

2. 研究方法

①文献調査

②ヒヤリング調査・対象・実施日

実施時期：2015. 2. 23.

対象者：元市長村職員

3. 結果・考察

(1) 老人保健法の成立

老人医療費については、1973 (昭和 48) 年より、老人福祉法の老人医療費支給制度により、老人の医療費自己負担分の無償化が実施されていた。しかし、財政的な背景や高齢者の増加などによって、1982 (昭和 57) 年になると、老人保健法が制定され、老人福祉法上の老人医療費支給規定は廃止となった。1986 (S 61) 年からの老人ホームへの入所措置の団体事務化と在宅サービスの法定化を前に、入所や利用の際のスムーズな事務システムが法改革上からも求められている時代背景の中にあった。

(2) 総合相談機関の構想

昭和 61 年には、老人保健施設が設立されるなど、かつては福祉事務所で行ってきた相談窓口だけでは、医療も含めた総合相談ができないことから、市役所内部改革を図り総合相談窓口を設ける必要があった。国際障害者年の真っ只中にあり、それら一連のイベントを通じて福祉や医療について考えてもらう機会を地域住民や市長など様々な人を巻き込むイベントを開催した。

(3) 我ら人間コンサート

このコンサートを開催することで、得たものは、住民の福祉への理解と絆、福祉業務の合理化、新たな社会資源の開発であった。保育所の統合、精神障害者の作業所設立、そして、これら住民の課題を総合的に引き受ける相談場所の設立であった。市長を含めた、福祉課題の解決を図る総合相談窓口構想は、住民からの意見を味方とした三者面談で、健康福祉課設立へとつながるのである。

(4) 寝たきり老人訪問医療の背景と実施

このように、福祉的課題と医療的課題の同時解決を目指した課で最初に実施したのが、高齢者の健康管理や、在宅サービス、入所サービスの利用を希望した家庭を回って健康状態を計測する「寝たきり老人訪問医療」であり、これを基盤にして在宅ケアが展開することとなった。実施にあたっては、県立遠野病院長の了解を得て行っており、市単独事業ではあるが、岩手県の派出機関と連携する形で行われたものであり、ここにも、新たな連携が生まれた。この事業は、1985年(S 60)から始めたものだが、現在(2015年)も継続している。

これは、開業医も少なく、交通インフラも整わない地域における手作りのサービスが実を結んだことを意味する。チーム方式を作ることで、施設入所や在宅サービスを受けるための診断的書類の作成がスムーズに進み、在宅ケアも進展した。

こうした、「在宅」患者・要介護者への保健医療福祉の連携は遠野方式と呼ばれ、地域包括ケアの先駆をなすこととなった。

4. 最後に

もともと、文化的行事などを通じて、まとまりやすい地域だったのと、福祉ボランティアを通じて、地域の課題や社会資源の開発に携わる機会に恵まれたことで、総合的な医療・福祉支援が展開されたと評価している。

引用文献・参考文献

1) 岩手日報社「岩手年鑑」昭和 42 年

2) 長江好道「岩手県の百年」山川出版社 1995

3) 奥田裕規・井上真「日本の山村の内発的発展とコモンズ」森林応用研究 22 (2). 1-11. 2013

1) 元岩手県立大学教員 2) 岩手県立大学名誉教授